



# 北方民族博物館だより

## No.134



EH9.9.262.14 水彩画 ウデヘ 縦39.5cm x 横30.4cm  
 収集地：ロシア沿海地方クラスヌイヤール、1997年収蔵

ウデへの画家イヴァン・ドゥンカイ(1952～2017)の作品。当館は18点の同氏の作品を収蔵している。彼はウデへだけでなく、渤海・女真などツングース系の中国王朝などをテーマにした絵画を描いた。ロシアの彼の地元クラスヌイヤールやウラジオストクの博物館に彼の作品が収蔵されている他、中国や韓国でも収蔵されている。

ウデへにはタイガをさまよって野生の朝鮮人参を採集する伝統があり、採集した朝鮮人参をヒマラヤスギの樹皮で作った箱に保管すると効果が長持ちするとされている。この作品では、この箱を作るために使用するヒマラヤスギの樹皮を剥いている様子が表現されている。

### 目次 Contents

- 1 表紙 水彩画
- 2 特別展「アークティック・ステッチ ～北方民族の刺繻～」
- 3 講座「世界の刺繻」  
     ／講座「日本の仏像史」
- 4 ロビー展「変わりゆく永久凍土の世界」  
     ／講座「永久凍土の融解と地形変化」
- 5 講座「永久凍土の上で暮らす」  
     ／展示報告 高島屋史料館TOKYO「ジャッカ・ドフニ」
- 6 INFORMATION



## 展示

# アークティック・ステッチ ～北方民族の刺繡しゅう～

2024.7.13(土)～10月20日(日)

北方諸民族は北方地域の自然環境の中で暮らすための様々な技術をもっており、その一つが縫製です。毛皮を縫いあわせ、身を守る衣服を作ることは、冬の寒さのなかで生きていくために特に重要なことでした。縫製の技術は衣服以外に、海獣皮製船、トナカイ皮製テント、白樺樹皮製容器等の作成にも用いられています。動物の腱や植物の繊維や根から糸が作られ、また最近では動物の腱に似せた糸も作られています。

寒さを防ぐためには、しっかりと縫い合わせれば十分ではありませんが、北方諸民族の衣服にはしばしば精巧な装飾が施されています。毛皮の色の違いを活かして組み合わせ文様を描いたり、皮を細長く切ってフリンジを施したり、天然染料を用いて染めたりしていました。

装飾は衣服を美しく見せるだけでなく、TPOの要請や、地位を示す場合もあるなど、当該社会と密接にかかわっています。さらに施される特別な装飾が身を守るという考え方もありました。

本特別展では衣服の装飾のなかで特に刺繡に注目しました。

刺繡には各地域で好まれる色や形がありますが、一方で近隣地域で影響しあったり、社会変化のなかで遠く離れた地域からデザインが持ち込まれたりすることもありました。

木綿、絹、化繊の布や糸、ガラス製のビーズが生活の中に入って以降は、それらが衣服の装飾にも使われるようになります。またこうした新しい素材は、刺繡文化を幅広く展開させることにもなりました。

展示ではサミ、サハ、イヌイト／エスキモー、北海道アイヌ、ウリチ、ナーナイ、ウイлта、ニブフ、コリヤーク、北方アサバスカの民族ごとのコーナーを設けたほか、比較

のためにクルグスとカザフの刺繡壁掛けを展示しました。このほか、刺繡の道具と民族衣装18セットで構成したステージを設けました。

サミの刺繡は、錫糸を用いた刺繡が少なくとも17世紀まで遡ることが知られています。現在、金属製糸による刺繡はサミの近隣諸民族の間ではみられず、サミに独自に伝わる技法になっています。

サハはウマとの関わりの深い民族らしく、ウマを装飾する布にも刺繡がほどこされています。

北海道・サハリン島・アムール川流域では渦巻きをモチーフに取り入れた文様がよく見られます。一見すると似ているようにみえますが、その文様の構成や施される部位、刺繡の技法には違いも見られます。例えば北海道アイヌの刺繡には、布を用いることがありますが、ウイлтаの刺繡は糸のみで行います。またアムール流域でも布が用いられることがありますが、刺繡はアイヌのように装飾布の中央に施すのではなく、布の縁に施されることが多いです。さらにナーナイでは、文様のなかにしばしば蝶、シカなど具体的な動植物が刺繡されることもあります。花嫁衣裳にはこれから生まれる子どもを象徴した鳥や、信仰されている龍の図柄が見られます。

コリヤークでは、ビーズ刺繡が行われています。衣服に直接縫われることもありますが、多くは円く切った皮にビーズで刺繡をほどこし、これを衣服や靴に縫い付ける方法がとられています。この円い刺繡はコリヤーク語で「月」とよばれます。

展示室では、ウイлтаの北川アイ子さん刺繡の型紙をつくることから、作品をひとつ仕上げるまでのダイジェスト映像を上映しました。

また、特別展にあわせて図録を発行しました。図版写真については東京文化財研究所の城野誠治氏、清水每子氏に協力いただきました。

作り手の思いがこめられた刺繡が北方諸民族の生活を彩どり、時には民族を表象するものになっていることを御覧いただけたことと思います。

(学芸グループ 笹倉いる美)



特別展入口



展示の様子

## 講座

世界の刺繡<sup>しゅう</sup>

2024.7.21(日) 10:00-11:30

講師：春日 一枝氏 (Bahar代表)

手仕事に関する著述や編集を数多く手掛けられ、世界中の刺繡に造詣の深い春日一枝氏を講師に迎え、特別展の講演会を開催しました。

刺繡は北方諸民族だけではなく、世界中で行われていますが、その技法や使われる素材は様々です。

担い手は女性が多い一方で、男性がいないわけでもありません。

メキシコのサン・アントニーノ村、ミャンマー、ラオス、ハンガリー、ルーマニア、ポーランド等の刺繡について、現地を取材された時のエピソードを交えて紹介されました。



春日一枝講師

冠婚葬祭で着用される衣服には決められた色で刺繡がほどこされます。教会のような特別な場は、信者の信仰心を投影した刺繡製品で飾られています。

普段の生活で身近なところでは、ポーランドのマカトカ(小さめの壁掛け布)があります。これには良妻賢母を促す「良い妻は夫の好物を作る」といった教訓をはじめとする格言が刺繡されていました。この格言入り刺繡は19世紀前半以降、ヨーロッパ中で見られたそうです。

春日氏は150枚もの写真をご用意くださったほか、ご自身が収集された刺繡製品を体験用にお持ちくださりました。

かわいらしい動物刺繡が並ぶラオス・モン族のものや、びっしりとジュズダマが刺繡されたミャンマーのカレン族の衣服や、様々な形のビーズやスパンコールが刺繡されたルーマニア・トランシルヴァニア地方のエプロンなど、何人かの参加者には実際に身につけていただきました。

当館の講座は普段どちらかというと男性参加者が多い傾向がありますが、本講座の参加者は大多数が女性で、講座終了後も講師を囲んで手仕事の話が尽きないようでした。

(学芸グループ 笹倉いる美)

## 講座

## 日本仏像史

飛鳥から鎌倉時代まで

2024.7.27(土) 10:00-11:30

講師：皿井 舞氏 (学習院大学教授)

前日に開催した「学芸員のための文化財写真研修会」で講師を務めていただいた学習院大学の皿井舞氏に、ご専門である仏像史についてお話いただきました。

当館が立地する北海道のオホーツク地方では、本州をはじめとする他の地域とは異なり、仏像展が開催されることも、仏像や仏像史について紹介されることもほとんどありません。このため皿井氏のご配慮で「仏像の基本のキ」から講座を始めていただきました。

信仰の対象には、仏像だけではなく、仏教を開いた釈迦の遺骨にあたる「舍利」もあります。塔を作って舍利を納めることがインドで始められ、日本にも伝わり、お寺に塔が備えられるようになります。そうした仏教用語にちなむ「シャリ」のような言葉が多くあることを紹介いただきました。それだけ仏教が長く日本で信仰されていたということでしょう。

そしてそもそもどのようにして仏像が生まれたのかを解説いただきました。さらに仏像には種類があるということで、悟りをひらいた如来と、修行中の菩薩の違いを、具体的な図像で説明いただきました。悟りをひらくと装身具が不要になって簡素な姿になるという説明には、参加者は大きくうなずいていました。

調査のためにCTで仏像を撮影したところ、中にびっしりと経典がはいっていた例を紹介されました。修理が必要になるまでは中を開けることはできないため、何が書かれているのかわかるのは100年後だということです。

人びとが亡くなった時の迎えにはランクがあり、もっとも徳を積んでいた場合は阿弥陀如来がオーケストラを従えて来られるなど秀逸なたとえ話が理解を助けてくれました。

当館が普段行っている北方先住民文化に関する講座とはまた違う内容でしたが、参加者からはとても新鮮で、こうしたテーマも扱ってほしいとの感想がきかれました。

(学芸グループ 笹倉いる美)



皿井舞講師



## ロビー展

## 変わりゆく永久凍土の世界

2024.5.25(土)- 6.16(日)

共催:ArCS II(北極域研究加速プロジェクト)・社会文化課題

北方圏の地下に広く分布する永久凍土は、地球温暖化の影響を受けて変化しています。そして永久凍土の変化は、その上に暮らす人びとの生活や地球全体の環境にも影響を与えています。本展示では、ロシア連邦のサハ共和国で続けられてきた研究の成果から、変わりゆく永久凍土の現状と、その生態系や人間社会に対する影響について、写真や地図、模式図などで紹介しました。

永久凍土とは、2年以上0℃以下の状態にある土壌または地盤です。北半球の大陸では、おおむね北から、永久凍土が連続的に分布する地域、不連続的に分布する地域、点在する地域が広がっています。永久凍土の分布地域でも、夏には地表面が融け、冬には凍結します。この凍結・融解を繰り返す地表付近の層を「活動層」と呼びます。

一方、永久凍土の中に氷が大量に含まれている場合があり、これをエドマと呼びます。温暖化によって活動層がエドマ層まで達すると氷が融け、水となって地下から失われます。そうすると、氷の体積が減った分だけ地面が沈下します。このようにしてできた凹凸のある地形をサーモカルストと呼びます。

永久凍土は、さまざまな形で人びとの生活に影響を与えてきました。例えば凍土が融解と凍結を繰り返し、数千年かけてできた「アラス」(湖を伴う皿状の草地)は、サハ(ヤクート)の人びとの伝統的な生活の場になってきました。森林地帯に点在するアラスは、ウマやウシの放牧地や牧草地、湖は人や家畜の飲み水の供給源、魚の漁場として大切な存在です。一方、近年の急速な永久凍土融解による地面の沈降は、建物の倒壊や農地の凸凹化を引き起こし、地域の生活や産業にとって脅威となっています。

(学芸グループ 中田篤)



展示風景

## 講座

## 永久凍土の融解と地形変化

～宇宙から数センチの沈降を測る～

2024.6.9(日) 10:00-11:30

講師:阿部 隆博氏(三重大学研究員)

ロビー展「変わりゆく永久凍土の世界」に関連し、地球温暖化によって融解する永久凍土とそれに伴う地形変化、そしてそうした状況を計測する最新の研究について紹介していただきました。

まず、永久凍土がどのようなものか、そして永久凍土の融解に伴う地形変化のしくみについて説明していただきました。また、ロシア連邦サハ共和国での地形変化の状況を現地の写真や映像で紹介していただきました。サハ共和国のバタガイ地域には、世界的に知られた永久凍土の大崩壊地バタガイカーメガスランプがあります。1990年代は狭い谷がある程度でしたが、2000年代に入るとその地形変化は急拡大します。現在は約1km四方の大きな崩壊地となり、さらに拡大が続いているとのことでした。

次に、こうした地形変化を計測する技術について、詳しく解説していただきました。人工衛星に搭載された特殊なレーダーから地表にマイクロ波を照射し、反射して戻ってくるマイクロ波を測定することにより、地表面の状態がわかります。異なる時期に測定した同じ場所の値を比較することにより、地表面の変化を数cmの誤差で計測することができるのです。

こうしたレーダーが、永久凍土の融解によって変化する地表面の測定にも使用されています。講師の研究成果として、シベリアの森林火災の跡地を測定し、火災後に地表面が沈降していることを示したのものや、同じくシベリアの耕作放棄地や住宅地が時間の経過とともに沈降していく様子を示したものが紹介されました。

かなり専門的な内容も含まれていましたが、参加者はシベリアの地形変化の現状やそれを計測する最新の技術に興味津々の様子でした。

(学芸グループ 中田篤)



講座の様子

## 講座

## 永久凍土の上で暮らす ～ロシア・サハ共和国の生業と文化

2024.6.15(土) 10:00-11:30

講師：中田 篤(当館 主任学芸員)

ロビー展「変わりゆく永久凍土の世界」の関連事業として、永久凍土地域で暮らすロシア連邦サハ共和国の人びとの生業や文化について紹介しました。

はじめに「サハの自然と永久凍土」と題し、サハ共和国の気候、植物や動物など自然環境の概要、永久凍土の分布状況などについてお話ししました。サハ共和国のほぼ全域で、地下に永久凍土が分布しているおかげで、わずかな降水量にもかかわらず北方林が生育できること、永久凍土が長い年月をかけて融解し、アラスなどの特徴的なサーモカルスト地形が作り上げられることを説明しました。

次にサハの民族と文化について、おもにサハ共和国の主要民族であるサハの伝統文化を紹介しました。特に詳しくお話ししたのは、サハの伝統的な生業であるウマ・ウシの牧畜についてです。寒さが厳しい土地で牧畜を行うために工夫された「バラガン」と呼ばれる冬の家や、夏には馬乳酒が作られ、神々に捧げられることなどを紹介しました。また、現代の牧畜の状況や家畜の冬の餌となる乾草づくりなどについて、現地撮影した写真をご覧いただきながら説明しました。

最後に「地球温暖化の影響」に触れました。地球温暖化は地球全体の現象ですが、寒冷な地域では温暖化が特に急速に進むとされています。そして永久凍土が分布する地域で温暖化が進行すると、地面の陥没や地滑りが発生したり、永久凍土に閉じ込められていたメタンなどの温室効果ガスが放出され、さらに地球温暖化が進行すると考えられています。実際にサハ共和国でも地面の陥没によって住宅が傾くなどの被害が出ており、今後のさらなる変化が心配されていることを報告しました。

(学芸グループ 中田篤)



講座の様子

## 展示報告

主催：東京日本橋 高島屋史料館 TOKYO

監修・協力：当館

## ジャッカ・ドフニ： 大切なものを収める家 サハリン少数民族ウイльтаと出会う

2024.3.16(土)～2024.8.25(日)

高島屋史料館TOKYOは、東京駅すぐ近くの高島屋日本橋店の4階にある、50平米ほどの史料館です。

2019年の開館以来、百貨店、建築（高島屋日本橋店は重要文化財に指定されています）等、高島屋に関わるテーマのほか、まれびとや陶仏といった民俗的事象を扱う展覧会を年に2回開催しています。

高島屋史料館TOKYOの海老名熱実館長からのお申し出により、網走にかつてあり、閉館後はその資料が一括して当館に収蔵された、資料館ジャッカ・ドフニについての展覧会を開催することになりました。

ジャッカ・ドフニは正式名称を「北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ」といい、1978年に開館しました。2012年に閉館するまで、サハリン先住民の文化を正しく伝えることを目的に、種々活動を続けてきました。

ジャッカ・ドフニの活動の中心となっていたのは、かつてサハリン島に暮らし、戦後北海道に移住してきたウイльта、サハリンアイヌたちです。どちらかという、これまで戦前期の文化を紹介することが多かったのですが、今回の展覧会では網走移住以降を中心とすることにし、展示資料のほとんどが、かつてジャッカ・ドフニに展示されていたものです。これは、移住したウイльтаの人々が作り上げたものでもありました。

観覧者には網走をはじめとする北海道から訪れた方や、また自分の家族が樺太からの引揚者だったと言う方だけでなく、何も知らなかったという方もいて、開催した意義を感じています。高島屋さんの英断により図録を発行することもできました。

このような機会を作り、開催期間中も支えて下さった高島屋史料館TOKYO並びに高島屋日本橋店のみなさまに感謝申し上げます。

(学芸グループ 笹倉いる美)



当館より貸出したグマーリニッカ(財布)(H24.138)

## 第38回北方民族文化シンポジウム網走

### 『映像と北方民族文化』ご案内

写真や映画など視覚表現を人類学的に研究する映像人類学では、北方民族文化を対象とした数多くの成果が上げられてきました。本シンポジウムでは、北方地域の事例を中心に民族文化を対象とした映像表現について検討します。

会期：令和6年(2024年)10月19日(土)～10月20日(日)  
会場：オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000)

大会議室 北海道網走市北2条西3丁目

内容：国内外の専門家・研究者による研究発表(同時通訳付き)  
発表者：内田順子氏(国立歴史民俗博物館)、岡田一男氏(東京シネマ新社)、岡田恵介氏(アイヌ民族文化財団)、田口洋美氏(狩猟文化研究所)、中村絵美氏(北海道大学大学院)、E.カステン氏(シベリア文化財団[ドイツ])、宋基燦(ソン・ギチャン)氏(立命館大学)、J.パナーコヴァ氏(スロバキア科学アカデミー)

座長：田口洋美氏(狩猟文化研究所)、高倉浩樹氏(東北大学東北アジア研究センター)、内田順子氏(国立歴史民俗博物館)、呉人恵(当館館長)

### ほかのイベントのご案内

◇シンポジウム関連事業「<sup>の かなん</sup>野花南」コンサート

日時 10月1日(火)18:30-20:00

出演：野花南(嵯峨 治彦氏、嵯峨 孝子氏)

◇講習会 ウィルタ刺繍

日時 10月6日(日)13:00-16:00

講師 ウィルタ刺繍サークル フレップ会会員

◇上映会 北方民族博物館シアター秋

日時 10月13日(日)10:00-11:30

◇講座 「アラスカの小さな村の現在」

日時 11月17日(日)13:30-15:00

講師 石井 花織 氏

(東北大学東北メディカルメガバンク機構助教)

◇講座 「北の植物」

日時 12月8日(日)10:00-11:30

講師 首藤 光太郎 氏

(北海道大学総合博物館助教)

## INFORMATION

### 行事報告

#### 講座・研修など

◆6月22日(土)、講習会「白樺樹皮工芸」(講師：山辺朋子氏、白樺細工工芸家)を開催しました。



道具について説明する山辺講師

◆7月26日(金)、学芸員のための文化財写真研修会(講師：城野誠治氏、東京文化財研究所専門職員)、皿井舞氏、学習院大学教授、他)を開催し、オンライン、現地参加共に全国各地の学芸員が参加しました。

◆8月2日(金)、「アイヌの歴史・文化に関する授業実践のために～デジタルアーカイブを利用した教材ワークショップ」(講師：大井将生氏、国立歴史民俗博物館特任准教授)を開催し、オホーツク管内にある学校の先生方が参加しました。



グループ発表資料を作成中の参加者

◆8月4日(日)、講座「ルーマニアの刺繍・工芸」(講師：谷崎聖子氏、伝統刺繍研究家)を開催しました。また、5日(月)、講習会「イーラシヨシュ～ルーマニア・トランスシルヴァニアの伝統刺繍～」を開催しました。



刺繍を解説する谷崎講師

◆8月7日(水)、(高校生のための)オープンミュージアムを開催しました。(写真右)



収蔵庫を見学中

◆9月13日(金)、講習会 アイヌ刺繍「ブックカバー作り」(講師：西田香代子氏、アイヌ文化伝承者)を開催しました。



アドバイス中の西田講師

#### イベント

◆6月16日(日)、第10回ユハンヌス夏まつりが開催されました。まつりではフィンランド風スープ「ケサケイット」が提供され、レイアロハフラ網走によるフラダンスやmix jamによるミニコンサートが開催されました。第17回モルック大会も盛会となりました。



モルック大会 優勝おめでとうございます。

#### はくぶつかんクラブ

◆6月8日(土)、はくぶつかんクラブ「皮で作るトラベルタグ」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。(写真左下)



熱心に講師の話を聞く参加者のみなさん



ポーズも上手に出来ました

◆6月29日(土)、はくぶつかんクラブ「白樺の皮で作るペンスタンド」(講師：平栗美紅解説員)を開催しました。(写真右上)

#### 北方民族博物館だより

No.134

令和6年(2024年)9月23日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会